

「リウマチ手記」匿名希望 65歳

2013年11月12日

我がリウマチ戦記

はじめに

団塊の世代で趣味はバイク、団塊ライダーと自称している。自分では物知りと自惚れていたが、医学については全く無知だった。リウマチが膠原病の一種であることを知らなかった。膠原病が現代医学では治らないと言われていることも知らなかった。

リウマチ性関節炎を患った私は早いうちに松本医院を受診し、今、ほとんど治っていると行って良い。後はアトピーを治すだけである。

どの世界でも、特別な発見や発明には、その名前が冠されることがある。発明者の名前を取って、江崎ダイオードと名付けられた世界最初の半導体は発明者の江崎博士にノーベル賞をもたらした。私の友人の確立した新しい白血病の治療法は、〇〇メソッドと固有名詞を付けて呼ばれている。新しいチャレンジに分野やレベルの差はない。

私は敬意をこめて、松本先生が確立したアレルギー性疾患の治療法を松本システムと呼びたい。

この手記は私自身の記録として、エッセイ風にまとめてみた。医学的な誤りがあれば、それは私の理解不足によるものである。大目に見ていただきたい。

現役時代

「団塊の世代」という言葉は、40年程前、堺屋太一氏が通産省の官僚時代に書いた同名の小説に由来する。しかし、この呼称が定着するのは十数年後の事だ。私たちが子供のころは現代っ子と呼ばれ、社会人になるころは新人類と呼ばれ、そして結婚適齢期にはニューファミリーと呼ばれた。それだけこの世代は突出して人数が多く、社会制度や消費動向に大きな影響を与えたからだが、そのうち色々な呼び方を考えるのが難しくなったためか、「団塊の世代」という呼称が再登場して定着した。世間で一括りに「団塊の世代」と言うとき、そこには画一的で没個性な集団、あるいは時代の流れに乗っただけの会社人間、と言った軽侮のニュアンスが僅かにある、と感じる。

私自身は、時代の流れに乗っただけの没個性な人間、とは微塵も考えていな

い。技術者として世界と競争して勝ち抜いたと思っている。最先端の電子機器に最高品質の電子材料を提供し、日本がエレクトロニクス分野で世界をリードするのに貢献した、という大きな自負がある。またバブル崩壊後の不況では、経営層の一角で会社を支えた。その詳しい内容は語るまい。あまりにも長くなる。ただ、働いている間は大変な我慢を自ら強い、そして大きなストレスがあったとだけ書いておこう。

会社生活を終えたとき、一切仕事をせず年金暮らしをする道を選んだ。これからは趣味を中心とした自由人として活動する道だ。言い換えると消費が新しい仕事である。カッコをつけているが、事実上は我慢とストレスの生活にうんざりしていたのである。

私はアトピーの一種である脂漏性湿疹を抱えていた。三十代半ばで発症したが、医師からは慢性なので治らないと言われていた。私は妻に、「会社を辞めたらストレスがなくなるし、湿疹も治るわ」と言ったが、後に甘かったことを思い知らされる。

変調

思い描いていた通りのストレスの無い生活になった。超大型バイクに乗り、一人であるいは隊列を組んで走り回る。多い場合は40台を超えるバイクが一斉に走る。と言っても、我々は暴走族ではない。きちんとルールを守って走る。走行距離は一年間で軽く1万Kmを超えた。ツーリングは日帰りだけではない。テント、寝袋、キャンプ道具を持参し、仲間たちと1~2泊のキャンプを楽しんだ。まさかこの年になってキャンプをすとはと思いつつ。しかし結構楽しいものだった。

バイクに加え、仲間たちと碁を打ち、好きな古寺社を訪ねる。いずれも私の趣味だ。自由人二年目には四国八十八ヶ寺遍路の旅と西国三十三観音巡礼の旅を終え、仲間から碁も強くなったと評されもした。予定通りの生活を満喫していた。

体の変調は自由人生活三年目の冬に始まった。右手親指の二番目と三番目の関節が痛みだした。あまり大きな問題とは思わなかったが、グリップをうまく握れないから、バイクの運転には支障が生じる。運転を自粛するしかない。春になるまで、約三か月間ハンドルを握るのをやめた。

暖かくなると痛みもなくなり、バイクも普通に運転できるようになった。以前と同じ生活が送れるようになったのだから、治ったと思っている。本当にお目出度い話だ。

自由人生活も四年目の冬の始め、再び関節が痛みだした。暖かくなればまた良くなるだろうと、高をくくっていた。春を待ったが、今回は違う。暖かくなっても一向に痛みは無くならない。しかも右手親指だけではなく、左肩や左足親指の付け根も痛みだした。春から秋は絶好のバイクシーズンである。乗らな

いわけにはいかない。痛み止めを飲みながら、バイクに乗った。そのときだけは痛みは止まっている。当然、薬が切れると痛みだす。心配になり、医者に行く気になった。

整形外科受診

自由人生活五年目の夏、私の頭には厄介なリウマチと言う言葉が浮かんでいた。そこで、近くのリウマチ科を併設する整形外科を受診した。

診断は加齢による関節変形だった。疑問を感じた私は医師に、「リウマチを心配しているのですが」と言うと、医師は「その心配はありません、痛み止めを飲んでいけば、そのうち痛みも引いてきます」と答えた。少しだけ安堵したことを覚えている。しかし、これは誤診だった。

この頃、お向かいのご主人が亡くなった。五年位前から体が痛くなり、同じ整形外科に行った。やはり加齢による痛みと診断されたそう。痛みはなくならず、大病院を転々としたあげく、何かの合併症で亡くなったとのこと。最後は10種類を超える薬を飲んでいたので、「薬のせい？」という疑問も浮かんだ。医者になった同級生の話だ。「お年寄りが来て、『あちこち痛いし、調子が悪い』と訴える。面倒臭いからはっきり『それは年のせいです。年のせい。仕方ありません』と言いたいが…」と言っていたのを思い出す。あの整形外科医はこの実践者だったのか？

その後我が家では、件の整形外科を名前では呼ばず、「あその〇〇」と呼んでいる。〇〇は診立ての下手な医者に贈られる名誉（^/?）の称号である。

内科・外科受診

加齢のためと診断されてから半年ほど経過した冬。関節はさらに痛くなった。指の関節も強張っている。関節は痛みながらしかもあちこちへ移る。睡眠に影響が出るに及んで、再び医者に行く決心をした。

今度は近所の医院に行った。地域で評判の医師だ。私の症状を聞いた医師は即座に、「典型的なリウマチ性関節炎ですね。早速血液検査をしましょう。検査結果は1週間後だから、また来なさい」と言う。この日、薬の処方はなかった。この1週間はつらかった。体が痛くて夜はよく眠れない。半年前の整形外科の診断にも腹が立つ…。1週間後ステロイドと痛み止めが処方された。ステロイドは1日2錠ずつ飲む。ステロイドは怖い薬と言われているが、私はその理由を知らない。医師の処方通りに薬を飲んだ。すると、痛みは劇的に改善された。リウマチと言う診断が出て、娘は松本医院の受診を勧めた。ここでアトピーの治療し、また友人がリウマチを直したという。私はリウマチの漢方治療についてネットで調べてみた。漢方に頼り、かえってリウマチをこじらせた事例が数件ヒットした。私はまだ深刻な病気とっていないのだから誠に始末が悪い。ネットの事例も考慮し、娘の忠告を聞き流した。

治療開始から三か月経過した。ステロイドは2日に半錠の量に減ったが、痛

みは無くならない。良くなっている気がしないので、医師に聞いた。

「最初の一週間で、劇的に痛みは小さくなりましたが、その後は横ばいです。ある日はあまり痛まなくても、別の日はかなり痛みます。良かったり、悪かったりの繰り返しで、全体では良くなっていません」

「それは違う。それをステイブル、安定している状態と言う」

と医師は答えた。看護師たちも笑っている。納得できない私は、

「いろいろネットで調べました。この病気が進むと、関節が変形したり、車いす生活になったりするようですが、私はそうなりたくはありません」

医師は、

「そうならないように薬でコントロールしていく。あなたの寿命の尽きるのが先か、車いすに乗るのが先か、病気の進行を抑えて、車いすに乗らずに済むようにすると言う考え方や」と答える。

「と言うことは、病状に応じて強い薬に変えていくと言う事ですか？」

「基本的にはそう言う事や」

その頃、私は生物製剤と言われる膠原病の新しい薬の存在を知っていた。

「先生、最近リウマチによく効く薬があるそうですが」

「よく効く薬は、副作用も強い」新薬を使う意志はないらしい。

「副作用って、どんなんですか？」

「例えば、ステロイドの一番の副作用は、体がステロイドを作らなくなる、と言うことかな」

「趣味でバイクに乗っていますが、今の状態では危険で乗れません」と言うと、医師は、「そういう生活のクォリティーを重視する場合は、強い痛み止めを飲んでもらう。リウマチは治らない病気や。一生その痛みと付き合わないかん」

診察のたびに交わした話をまとめるとこうなる。私は初めて深刻な病気であることを認識した。自由人生活六年目に入った四月末の事であり、最初に体の変調を感じてから二年半近く経っていた。

家に戻り、今後どうするか考えた。今の治療を継続するのか、或いは新しい治療を探すのか。改めて「リウマチ」と「完治」をキーワードにネット検索してみた。治ると言うサイトが次々に出てくる。大半が怪しい民間療法のようなもので、到底信用できない。三時間くらい調べているうちに、松本医院がヒットした。「あっ、娘が勧めていた病院！」院長の論文と患者の手記を読む。論文はよくわからなかったが、院長の「必ず治ります」という言葉と、患者の手記には説得力があった。転院を決意した瞬間だ。

松本医院の初診

4月30日(火)、松本医院に行った。アンケートに記入し、看護師の問診を受けた後、しばらく待合室で待っていると第1診察室(1診)に呼ばれた。そこには若い医師が座っている。私が入っていくと、

「一人ですか」と聞く。「いえ、妻が待合室で待っています」と答える。

「呼んで下さい。一緒に聞いてもらいます」

改めて、二人で診察室に座る。若い先生は自分の名前を言った後、
「ジュニアです」と付け加えた。(以来、私はジュニア先生と呼んでいる)。
「ここがどんな医療をする医院か知っていますか？」
これが最初の質問だった。一般的には、症状を聞くところから始まるので、多少面食らった。「はい、インターネットで調べましたから」
ジュニア先生は改めてアンケートを見る。そこには、松本医院を知った理由の項目で、家族がかかったことがあるとインターネットを見た、の二つに○印を付けている。「ご家族がかかったことがあるのですか？」
「娘がアトピーの治療でこちらにお世話になりました」
ジュニア先生は「えっ！」と言う顔をして、
「それでは、何故最初からうちに来なかったのですか？」
どう答えるか思案をしているとき、隣の第2診察室(2診)から院長が突然1診に入って来て、いやむしろ来襲と言うべきか、私の代わりに、
「それはうちを信用していなかったからや」と言った。私は仕方なく、
「はい、その通りです」と答える。
こんな風に松本医院での初診の会話が始まった。誠に風変わりな診察風景である。問診と言うより質疑に近く、場合によっては問答の様相を帯び、さらには演説が始まる。「この近くには大病院もあるし、有名な大学病院もあります。なぜそちらに行かなかったのですか？」というジュニア先生の質問には、
「今かかっている病院では、リウマチは治らないと言われました。現代医学で治らない病気と判断しているのであれば、大病院でも大学病院でも考え方は同じでしょう。こちらの院長のコラムには、はっきりリウマチ治ると書いてあります。それでこちらに来ました」とまさに模範解答だ。「それでは“治る”とはどういうことですか」回答を思案中に再び院長が来襲してきた。
「この本を読みなさい」院長はベンジャミン・フルフォードの書いた『人殺し医療』のパンフレットを私に見せた。

院長は言う、
「医薬業界は症状を抑えるだけの薬を開発し、医者はそれを使って症状が出なくなれば病が治ったと言う。」さらに続けて、
「金もうけのため医と薬は結託して、間違った考え方で薬を投与し、新たな医原病と言う病気を作り出して、そして多くの患者を殺している」もはや演説である。時々院長の来襲があるので、話はあっちに行ったり、こっちに来たり。長時間の診察(会話?)であったが、私にはだんだんわかってきたことがある。一風変わった医師と患者の会話の目的は、目標をはっきり患者に認識させる事。目標は症状を抑えることではない、発症した原因を取り除くこと。そして、これから長い期間がかかるかもしれない闘病生活に、覚悟を持って臨ませる事の二点ではないか。後日、院長から病気の分類について質問された。その頃にはこの手の質問には簡単に答えられるように成っていた。
「病気が認識された最初のうちは症状で分類したと思いますが、その後は原

因で分類します」院長は笑って、「その通り」

ジュニア先生から現在服用している薬について聞かれた。

「ステロイド、抗リウマチ薬、痛み止めを飲んでいます」「すべて捨ててください」と素っ気ない。「そのほかに気になる症状はありますか？」

「30年位昔から脂漏性湿疹が出ていて、医師からは治らないと宣言されています」「えっ、それもアレルギーですから治ります」

「まぶたの裏がピリピリと猛烈に痛くて、アレルギー性の結膜炎と診断されています。二種類目の薬をもらっています」

「原因はヘルペスですね。それも治ります。目薬は捨ててください」

そのほかの気になる症状として、花粉症、昔の慢性気管支炎、時々出るジンマシンなどを伝えた。三度目、院長が入ってきた。しかし、今回は問答ではなく励まされた。「必ず治ります。しかし、治すのは自分ですよ」

そして論文を何度も読むように言われて、初診は終わった。薬と薬の処方箋を受け取り、鍼灸治療の予約を取って帰路についた。

闘病 I

翌5月1日の朝、ステロイド、抗リウマチ薬、痛み止めをゴミ箱に放り込んだ。痛み止めは残そうかと一瞬思ったが、捨てた。関節痛に塗るチューブ入りの外用薬二本を捨てた。一本はまだ未使用だ。二種類目の目薬、計3本を捨てた。これも一本は未使用だ。花粉症の抗ヒスタミン剤も捨てた。ジンマシンが出た時に塗るメンソレータムADも捨てた。すべての薬を捨てて本当に大丈夫だろうかという心の揺れは、実はわずかに残っていた。こうして松本システムによる治療はスタートした。

リバウンドは翌日から始まった。あちこちの関節が順番に痛む。夜よく眠れない。特に苦痛だったのは、指の関節を曲げると激しく痛む、という現象だった。指を曲げられないようにテーピングをしてしのいだ。

痛む関節には、教えてもらった通りに徹底して灸をすえた。毎日、午前・午後・夜の三回、灸をすえる。その総数は毎日六百壮以上になった。この痛みは一週間ほど続いた。

その後、さらに二回リバウンドが来たが、その度に痛みはより軽く、期間はより短くなった。最後は治療開始後約一か月半経過した六月中旬頃だった。それ以降リバウンドはやって来ない。

院長の論文によると、リウマチの治療が進むとアトピーが発症する。私の場合、治療開始約二週間後にアトピーの痒みが襲ってきた。

五月中旬、自分の症状が論文通りに推移していくのを体で感じて、やっと全面的に信じるようになった。この時まで。一抹の不安があったことは事実なので、この手記に書いておこう。

鍼灸治療

鍼灸治療を受けた。鍼灸師からどういう体の状態かを聞かれた後、一通りの治療を受けた。そして、自宅での灸の据え方を教えてもらう。もぐさを細長い紙縫りのような状態にし、少しずつちぎって患部に乗せる。患部にはあらかじめ赤い軟膏を薄く塗っておけば、もぐさは落ちたりしない。その後、線香で火を着けていく。一壮ずつでも数百壮まとめてもいいという。ここでのポイントはもぐさを最後まで焼切ることにあるという。赤い軟膏はやけどになった皮膚を再生する薬効があるそうだ。

「熱いでしょう？」と聞くと、「はい、熱いです」と答える。

「痛いでしょう？」と聞いても「はい、痛いです」と答える。

さらに、「関節が痛い場合は、集中的にお灸をすえてください。同じところに何回すえても構いません」という。

「水膨れができた場合、つながって大きくなり易いので少し離して据えるといいですよ」とアドバイス、初めて聞く優しい発言だ。そして、毎日二千壮の灸を据えた人の事例を聞いた。写真がドアに貼ってある。膝頭はまるで針ネズミのようだ。

その後、灸の効果を自分の体で実感した。確かに関節に灸を据えると、一時痛みが和らぐ。沢山据えるとさらに和らぐ。私は痛む関節に、3mm 間隔の高密度に灸を据え、最初は毎日何度も実施する方式を採用した。痛み止めを飲まないのだから、覚悟して灸を据えるしかない。

灸のもう一つの狙いはアトピーを人為的に作り出すことではないだろうか。松本理論によれば、リウマチの原因である IgG 抗体を IgE 抗体にクラススイッチさせてリウマチの治療を進める。当然、関節痛が治まる代わりに、IgE 抗体によるアトピーが発症してくる。アトピーがひどければそれだけリウマチの治療が進んでいる。一方、灸を据えた跡は、あたかも人工的な疑似アトピーになる。沢山灸を据えるほど、クラススイッチを促進している事になるのではないだろうか。漢方薬でプッシュし、灸でプルする。戦略的なプッシュ・プル作戦である。この点からも灸は大変重要である。(素人による勝手解釈です)

疑似アトピーにも特徴がある。ひどくなる部分と軽く済む部分に分かれる。ひどい部分は赤い変色跡が広がり、ジュクジュクになり、そして水が出てくる。こういう時は治りにくい。以前、アトピーを発症していた皮膚に灸を据えるとこうなりやすい。私の場合は、パンツや靴下のゴムで締め付けられる部分が該当する。鍼治療でも驚いたことがある。治療開始から約三週間、二度目のリバウンドが治まりつつあった頃のこと。頸は左右に各 30 度程度しか回らないし、左肩は 90 度程度の角度しか上げられなかった。この問題を先生に伝えると、頭頂部と額の生え際に鍼をうたれた。頭蓋骨に刺さったと感じたほどだ。結構痛かったが、なんと症状は劇的に改善したではないか。治療の終わり頃には、頸は回るし、肩も上がる。この日の帰り、自転車の安全確認は頸を回して行った。今までは体をねじっていたのだから大違いである。大いに感動し感謝した私であるが、四か月たった今はもうほとんど忘れていた。手記を書かなければ思い

出さなかったかもしれない。人間とはそんなものである。
医院の待合室には、免疫を上げるために鍼灸治療を受けるようにと張り出しているが、それ以外にもいろいろな効果を体感することが出来た。
二人の鍼灸師が患者を診ている。私は全部で19回の治療を受けたが、16回は同じ先生だった。別に指名したわけではない。そして、お灸の1壮、2壮と言う数え方は初回の治療で教えてもらった。

院長

変わった院長である。患者に真摯に向き合うから、三分診療などと言う事はない。質問にも丁寧に答えてくれる。特に初診の時は患者が納得するまで話し合うので、30分以上かかることはざらのようなのである。遠方の患者には電話で診察して薬を送る。こんなスタイルは診たことがない。ジュニア先生も全く同じスタイルだが、こちらはごく普通の人である。

政界にもこんな親子がいる。変人と言われた総理大臣がいた。政界を引退するに当たり、次男を後継者に据えたが、至って常識人で普通の人と言う評判だったように記憶している。

院長の歯に衣を着せぬ言辞は独特である。ある種の怒りが時々吹き出すようだ。ある日、鍼灸治療を受けていた時のこと、いつものように院長の電話の声が聞こえてくる。私が、「人生幸郎師匠のようだな」と言うと、鍼灸師はクスッと笑い、「責任者出てこい！ですか」と答えた。20年ほど前に死んだ漫才師だからもう覚えている人の方が少ないかもしれない。彼は相方に政治・経済などの社会の矛盾や不条理を指摘し、怒り、痛烈に批判し、そして最後の決め台詞が「責任者出てこい！」だった。

松本医院の患者になれば、院長本人から必然的に聞かされることになるが、私が感じた医学界や医薬業界の矛盾を書き留めてみたい。私は、「変わらない定説」、「対症療法の愚」、「医療費の怪」の三点に集約してみた。

変わらない定説

何故か、一度定説ができるとなかなか変わらない。どこにでもある現象で、時には神話にさえなるケースもある。私は身を持って感じさせられた。今年の四月、私は医師から「リウマチは治らない、痛みと一生付き合う病気や」と宣告された。医師の友人達も口を揃えて同じことを言った。それから約半年経ったいま、九分通り治った(?) 私はこの手記を執筆している。院長の言によれば、百万人の患者を診て、治したと言う。誇大だとは思いますが。院長は論文を書き、学会で発表もしている。加えて、治った人は手記を書いている。しかし、「膠原病は治る病気です」とならない。定説は今でも「治らない病気」である。なぜだろう、私の考えた理由は以下の通りだ。

大学を頂点にし、学会で横の連携を図る今の医学界のシステムが、新説や異説の登場を排除しているのではないか。簡単に言えば、ボス教授が「黒」といえば、配下の弟子たちも何も考えずに「黒です」という。典型的事象に思える。

そうしていれば楽だからだ。

対症療法 of 愚

この言葉も身をもって体験した。今でもステロイドなどの症状を抑えるだけの薬を飲んでいたかもしれない。と考えると少なからずゾットする。この病気で一番つらかったことは体が痛いことではない。朝起きた時にあちこち痛むと、その日一日何もする気が起きなくなることだ。気持ちの落ち込みが一番の問題だった。

リウマチにステロイドを投薬することを「対症療法」と言うと、先生方は怒ってくるだろう。今、どこの大学病院でもあるいは専門病院でも実施している標準治療だと。しかし、原因に手を打たず、症状だけに対応する治療はやはり間違っている。

医療費の怪

この問題は、治る医療には保険が利かず、治らない医療に保険が利く、と言う点である。どう考えても納得のいく話ではない。

私の余命を20年として、治療に掛る個人負担額を計算した。治らない現代医療では、自己負担率30%として、最低でも20年間で120万円、もし高価な生物製剤での治療を受ければ、期間にもよるが500万円を超える可能性もある。正確な推定は難しいが、私の負担を3百万円程度とすると、当然保険機構側が残りの7百万円程度を負担する。後期高齢者になれば、公的負担はさらに多額になる。一方、松本システムでの治療では、私の治療期間を最大15ヶ月とすると、一部に保険は利くが、私の個人負担は80万円程度になろうか。もし保険が利けば、その半額程度になる。

治る治療に保険を適用すれば、個人と保険機構双方が利益を得ることは明白である。「責任者出てこい！」と怒鳴りたくもなるというものだ。

ヘルペス

膠原病と戦うとき、必ず出てくる脇役がヘルペスウイルスである。仮面ライダーが最後にボスと戦う時、ウジャウジャ出てくるショッカーのような、あるいは黄門様が助さん格さんを従えて悪代官を退治する時、バラバラと出てくる侍のようなイメージだ。

所が、ヘルペスはバツバツとやられる彼らとは全く違う。ほとんど全ての人間が感染している。そして神経節と言うところに潜んでいる。その住処は厳重に守られて、人間の免疫も入って来られないところである。院長の論文によると、人間はこのウイルスへの免疫を獲得できないので、ワクチンも製造されていないそうだ。したがって、退治されることはない。そして、突然主役にさえ昇格することのある狡猾なウイルスだと言う。大変厄介な存在だ。

人間の免疫力が低下すれば、住処から神経に沿って出てくる。そこで免疫との戦いが起こり、いろいろな症状が出てくる。あくまで症状はウイルスと免疫の戦いによって発生するものである。ウイルスが優勢なら神経から筋肉、腱ある

いは皮膚など色々なところに蔓延り、免疫と戦い、そして様々な症状が現れる。この症状の多様さは驚くばかりである。逆に免疫が向上するとあちこちのヘルペスウィルスに戦いを仕掛け、同様な症状が起こる。ヘルペスウィルスを神経節に押しこめるまで戦いは続く。

私の体にも様々な症状が現れた。筋肉や筋・腱のコリ・強張り・痛み、脇の裏や皮膚のピリピリ感、下肢のモヤモヤ感・火照り等である。突然出てくる痛みもある。我慢できない痛みには抗ヘルペス薬を服用する。一回一錠を四時間おきに三回程度服用すると、痛みも軽くなった。

リウマチによる関節痛かヘルペスによる痛みか区別できない場合、初めに集中的に灸を据えると良い。痛みが軽くない場合、抗ヘルペス薬を飲む。こうしてリウマチとヘルペスの痛みの違いが分かってくる。違いが分かれば、対処法も分かるというものだ。

私の頑固な頸の痛みも、治療開始してから二か月半位で消えたが、二日間だけだった。そして、一か月後また痛みが消えたが、今度は一週間程良好な状態が続いた。このようにだんだん痛い期間が短くなり、痛みのない期間が長くなっていく。すぐには治らないが、徐々に良くなる。時間がかかることを自覚しなければならない。

闘病Ⅱ

闘病開始から三週間位経過した頃、生活にもリズムが出てきた。夜、二種類の漢方薬を煎じ、翌日一日をかけて飲むのだが、一番、二番煎じまではきれいに飲んだ。それで、2リットル近くになる。三番煎じまで飲むと、お腹がガボガボになり、食欲もなくなるのでギブアップした。それぞれの薬を食前酒一番、食後酒二番等と呼んだ。特別な理由はないが、時に沈鬱になる闘病を楽しくするための工夫である。

どてらを羽織った患者がゲホッゲホッとセキをしながら布団の上に座り、横に火鉢を置いて薬を煎じている。吹きこぼしても、煮詰めすぎてもいけない。患者が一番暇なのだから、自分で責任を持って煎じる。時代劇等でよく出てくるシーンだ。

時に面倒な漢方薬の煎じ方も、一年ほど前にIHクッキングヒーターに変更していたため、極めて簡単なものになった。鍋に所定量の水を入れ、そこに漢方薬を入れる。火力を選択しタイマーをセットするだけである。失敗は無いし、時間が来れば教えてくれる。

昼夜二回、家内に灸を据えてもらっていたが、最初は100 壮の灸に三時間くらいかかっていた。しかし、すぐに上手になり、30分位で済むようになった。大変な進歩である。これをズーっと続けてもらった。感謝以外の何物もない。

四週間ごとに血液検査をして、病気の治り具合をモニターしてもらえる。これが結構励みになる。ジュニア先生に、何を中心にモニターしたら良いのか聞いたら、私の場合はRF 定量とCRP 定量の値が良いと言う回答だった。治療を開始時点と六か月後の数値を対比してみる。明らかに改善されている。通常なら

完治と判断されるところかもしれないが、松本医院では引き続き治療が必要と言う判断だ。今はヘルペスの痛みや手足の強張り、痺れが時々襲ってくるものの、リウマチ性の関節痛はほとんど感じない。

2013/04/30	RF 定量	53	基準値 15 以下
	CRP 定量	1.10	基準値 0.30 以下
2013/10/18	RF 定量	15	☆☆☆
	CRP 定量	0.14	☆☆☆

闘病を通じて自分の体で感じたことがある。松本システムでの治療の一か月は、病状を一年間さかのぼることに相当すると。別にデータで定量的に感じたわけではない。あるとき、今の体の状況は〇年前と同じだと感じたことを、数値化しただけである。そこで私は症状が軽くなるまでには3か月程度、治るまでは5〜6か月と見積もった次第である。さらに、アトピーの症状の改善は、治療一か月が2〜3年の症状遡りに相当すると考えている。発症以来35年程度経つので、私は15ヶ月くらいでアトピーからも解放されると期待している。

終章

院長の説明によると、膠原病には真面目で責任感が強く我慢強い人が良くかかるらしい。そういう人々は副腎皮質ホルモンを多く出すらしい。私はよく該当している。そして色々な慢性疾患を抱え、ステロイドを使用してきた。これらが原因になったようだ。今、完治にはまだ遠いが、体は随分楽になった。複数の方々の手記を読んで感じたことであるが、他の患者さんと比較して、私の病気の治り具合がかなり早いようだ。ジュニア先生によると、「早く当院に来たことで、ステロイドの使用総量が少なかったことと、男性であること、の二点の理由があります。女性ホルモンは免疫を抑制するので、リウマチの治療にはマイナスです」人間の免疫は絶妙なるバランスの上に成り立っているようだ。異物が体内に侵入してくると、それを排除するため免疫との戦いが起こり様々な症状が現れる。同時に、免疫バランスが微妙に崩れるのではないだろうか。現代医療は症状だけを抑えて、崩れた免疫バランスを崩れたまま無理に固定化させるような方法であるようだ。これが私の得た教訓である。

11月に入り、馴染みのバイク店の店長に電話をした。私の体力に見合った軽くて操作性の良いバイクを探して欲しいとたのんだ。来年暖かくなった頃から、また新しいバイクライフを始めよう。